

## 「すうがく数学アレルギー」

高一の春が終わるころ、花粉アレルギーと入れ替わるようにして発症する病が存在する。

数学アレルギーである。

二次関数の習いはじめくらいのこと。数学の教科書を眺めるだけで、くしゃみが出たり、鼻水が垂れたりしだすのだ。人によっては目が赤く腫れ、ひどい場合は蕁麻疹じんましんが出ることもある。まともに勉強できるはずもなく、このアレルギーに悩まされる生徒はじつに多い。

頭を抱えるのは生徒側だけの話ではない。数学教師も同じように苦しんでいて、ここE高で数学を教えるM先生も毎年悩まされる問題だ。

M先生は、若手ながらすでに名教師の呼び声も高い先生で、数々の生徒を名門大学に合格させてきた。その実績に注目して、数学の学力低下を嘆くE高が白羽の矢を立てたのだった。M先生の数学への情熱は半端はんぱではなかった。

教科書や学校指定の問題集を活用するのは当然ながら、それにとどまらず自分でオリジナルの問題集までつくってしまう。そのプリントは「MPリ」と呼ばれ、週末になると配布される。

なぜそこまでして生徒に熱く数学を説くのか。根底には、揺らがぬ信念があった。

「数学は美しい」

それがM先生の持論であり、口癖だった。

受験で成功してほしいのは、もちろんだ。だがそれ以上に、数学の美しさを少しでも多くの人に伝えたい。本当の数学とは、人生を豊かにするものだ。

そういう思いで熱弁をふるい、自分の時間を削けずってまでも良問作成に日々心血を注いできたのである。

数学アレルギーという病は、そんなM先生にとって最も忌むべきものだった。

生徒の努力不足による数学嫌いだったなら、いくらでも改善のしようがある。しかし、これは体質による病。症状に苦しみ数学が手につかない生

徒たちを前にして、自分は何もしてあげられない。M先生は無力感に苛さいなまれ、ずっと心を痛めてきた。もつとも、受験で数学を使わない文系の生徒はどこ吹く風だった。授業になっても、教科書を開くことさえしないのだ。よって、アレルギー症状も出ようがない。また、受験科目に含まれてはいないものの、最初から数学は捨てている生徒も同じだった。

まあ、そういう輩やからは放ほうっておいて構わない。可哀かわいそうなのは関係する生徒たちだ。

M先生は、これまで何とか見て見ぬふりで授業をしてきた。

生徒たちは症状を我慢してまで、自分についてきてくれているのだ。ここは心を鬼きにして、教鞭きょうべんをとりつづけるのが本当の誠意というものではないかろうか。

しかし、E高に赴任してからは、その考えが少しずつ変わっていった。

数学の学力低下は、じつはE高に限った話ではなく、近年になって全国的に指摘されるようになって

っていた。その原因が、数学アレルギーに罹る生徒の増加である。

それもあって世間では、数学を煙たがる風潮が蔓延まんえんしつつあった。

どうして辛いつら思いまでして、こんなものを学ばなければならぬのか。体質の問題なのに無理やり押しつけてくるなんて、虐待とどこがちがうんだ。どうせ社会に出てから役に立たないんだからさあ。

このままでは、数学の美しさを広める以前に数学そのものが世の中から抹消まっしょうされてしまう。それに加えて症状に苦しむ生徒たちのことを考えれば、本来、放っておくべき問題ではなかった。

M先生は決意する。

数学アレルギーを何とかしなければ、数学に未来はない。誰かに解決してもらおうという気持ちではダメだ。自分がこの手で、厄介やっかいな病に打ち勝つのだ。

M先生は、地元の大学の大学の数学科に共同研究を持ちかけた。それと同時に医学部にも働きかけて、

数学アレルギー発症のメカニズムの解明に着手した。

放課後や休みの日に、足しげく大学に通う日々がはじまった。

E高での仕事を最大限にこなしつつ、寝る間も惜しんで研究に没頭する。

文献調査をしようとも、世界でも先行事例は皆無である。そこでM先生の研究は手探りの中、実験主体で進められた。

たとえば、こうだ。

症状の度合や種類を正確に把握するための実験では、まず数学アレルギーに罹っている被験者を広く集めた。そして彼らに、数学の参考書「チャート式」を見せていった。

チャート式は難易度によって四つの種類に分かれていて、白、黄、青、赤という順番で難しくなっていく。被験者に易しいほうから見せていって、症状が出たところで参考書の色と症状の出方を記録する。

その結果、数学アレルギーには個人差があるこ

とが示された。白いチャートを見るだけでダメな人。黄色では何ともないのに、青を開いた途端に反応が出る人。ただ、赤いチャートだけは例外なく全員が表紙を見ただけで悶絶もんぜつした。症状の出方で一番多いのは鼻水、次いで多いのが目のかゆみだということも確認できた。

しかし、単に症状を把握はあくするだけでは何も解決していない。そこでM先生は、症状の軽かった被験者と重かった被験者を比較して、何がちがいをもたらすのかを探りはじめた。また、逆に数学が得意な被験者も集めてみて、身体からだの中で何が起きているのかを調査した。

この研究に、M先生は数年の歳月を費やした。やがて、ひとつの結論を導きだすことに成功する。

数学アレルギーりかんしやの罹患者りかんしやの体内では、数式や数字、図表などから刺激を受けて、アレルギー症状を引き起こす未知の物質が放出されていることが分かったのだった。

M先生はその物質を「マセマチン」と命名した。

マセマチンは、数学が得意な人の体内では見られなかった。

諸悪の根源を発見し、M先生は思わずチームメンバーと抱き合った。そして研究チームは、マセマチンを抑える薬の開発に取り組みはじめた。

だが、解明すべき大きな謎なぞはもうひとつあった。人はなぜ、数学アレルギーに罹るのか。

その答えに迫るべく、M先生は数学大国インドへ旅立った。

インドの学校を訪れてみて、驚愕きょうがくした。数学の授業を受けている生徒たちを視察しても、誰もアレルギー症状が出ていないのだ。

M先生は、すぐにインドの生徒たちに協力を仰あおぎ、身体の検査を行った。そして日本での実験結果と照らしあわせていくうちに、やがて、真まっ暗くら闇やみだった世界に一筋の光が見えてきた。

どうやら人には、数学に対する許容量というものがあるらしいと判明したのである。

「空の器に水滴を垂らしていくのを想像してみてください」

M先生は、後の講演で語っている。

器の大きさが、その人の数学に対する許容量を表している。数学に触れるたび、器の中へと水が一滴ずつ垂らされていくという具合だ。

するといつしか器は水で満たされて、ついには溢れる。それこそまさにアレルギー発症の瞬間であり、それ以降、器の水は溢れつづけるわけである。

この器の大きさには人によってバラつきがあつて、それがすなわち、数学許容量の個人差なのだ。数学が得意な人間は、生まれつき器が大きくバケツほどもあると思えば分かり易い。いくら水が垂らされようとも、バケツは簡単には溢れない。数学大国インド出身の人の場合はなおさらで、みんなバケツどころかドラム缶ほどの器を持っているのである。

一方で、平均的な日本人、とりわけ近年の若者は、許容量がお猪口ちよこほどの大きさしかない。となると水が溢れだすのも早いわけで、数学アレルギーに罹る人間は多くなる。



そして一般的な日本人だと、生まれてから触れつづけてきた数学の量がお猪口から溢れるほどになるまでに、だいたい十五年ほどの年月がかかる。まさしく高校にあがって二次関数を習う時期と、ぴたりと一致するのである。

ここに至って、M先生は快哉かいさいを叫んだ。ついに、数学アレルギーのメカニズムを解明したのだ。

だが、と、彼は考えた。

個人差はあるにせよ、そもそも、どうして人間の身体には数学に対する許容量というものが存在しているのだろうか。教科は数学以外にもたくさんある。たとえば、国語アレルギーなどが存在しているてもよさそうなのに。

「これは仮説の域を出ませんが」

自身の講演で、M先生は最後にいつもこう語る。

「おそらく遺伝子レベルで、まだ人間は数学に適応しきれていないのではないかと考えています」

言語に比べると、数学は誕生してから歴史が浅い。言語のほうはすっかり身体に馴染なじんだが、数学は、いまだ順応の途上にあるのではないか。

いまの世のように数学を腫れもの扱いするのではなく、根気よく、しっかり寄り添いつづけねばならない。そうすれば、いずれ人類は数学に適応できる時がくるだろう。

数学許容量を後天的に増やすことは難しい。

けれど、遺伝子レベルで適応できた未来には、許容量などという概念さえもなくなって、自在に数学と戯れられるようになるだろう。いつになるかは分からないが、そんな日が早く来ることを願ってやまない。

「ですが先生、あんな辛い思いまでして、果たして人類が数学に適応していく必要性などあるのでしょうか。いっそ、きっぱり決別するのもひとつの手ではないでしょうか」

会場からの質問にも、M先生は冷静な顔を崩さない。

「もちろん、選択肢としてはあるでしょう」

ただし、数学の有用性は計り知れないものがある。現に表面からは見えないだけで、現代社会を支えているのは間違いなく数学だ。

数学というものが誕生してすぐのことならば、それから距離をとる道もありえたかもしれない。が、いまとなつては後戻りするよりも、いかに早く適応するかに尽力したほうが賢明だろう。

「たしかに、おっしゃる通りかもしれませんが。ですが、人はなぜ、はじめの時点で数学と生きる道を選んだのでしょうか。単なる偶然なのでしょうか」

M先生は断言する。

「いえ、それには必然性があると考えます」

「必然性?」

「美しいからに、ほかなりません」

胸を張って主張する。

「数学は、じつに美しく尊いものなのです。だから人は、数学に惹かれる。私はみなさんにも、その美しさに気づいていただきたいのです」

マセマチンを抑える薬は、異例のスピードで開発された。新薬開発の事実がどこからか漏洩ろうえいしてしまつてからは、薬を求める声が殺到して、さら

に開発は加速した。

M先生は休職届まで出して、研究室に通い詰めた。

その努力の結晶が「アレグラ<sup>ミュー</sup>ム」という薬である。

アレルギー反応を抑える薬「アレグラ」。その成分を改良して、M先生はついに新薬をつくりあげたのだ。

すぐさま記者会見が開かれて、薬は爆発的に広まった。

数学アレルギーを患っている人たちの症状は、劇的に改善した。

数式を見ようが何ともない。図形が目飛びこもうが動じない。問題文もすつと頭に入ってくる。ただし、数学アレルギーを克服することと、根本的に数学を解けるようになることは、まったく別の話である。あくまで新薬は症状を抑えるためのものなのだ。

だから調子に乗って、今度は数学の問題がラクに解けるようになるための薬を求める者が現れた

が、M先生は冷たく言った。

「勉強するのが一番の薬です」

こうしてアレグラムは高校生の必須アイテムとなり、高校生に限らず趣味で数学をはじめた人も続出した。もともとアレルギーに悩まされていただけで、数学に興味のある人はたくさんいたのだ。ただ一部には、体質的に薬があまり効かない人も存在した。そういう人には、薬と並行して開発されていた特殊ゴーグルとマスクが与えられた。アレルギーにはヨーグルトが良いらしいことも分かっていたため、同じように推奨された。

また中には、新薬の登場に苦言を呈する人たちもいた。もともと数学が得意だった者たちだ。

彼らは特に受験のライバルたちがこぞってアレグラムを飲むのを見て、ドーピングだと抗議した。しかし、言うまでもなく大多数の意見に押されて流されていた。

ところで、世の中にはM先生のような「数学者」という人種がいる。

数学者になるような人物は、単なる数学好きとはものがちがう。生まれつきの数学許容量が、ずば抜けて高いのだ。

が、彼らが生涯、数学アレルギーと無縁かと言うと、じつはそんなことは皆目ない。数学に触れつつけていれば、どんな器もいつかは溢れるときがくるからだ。

職業病と言うべきか、数学者は年をとると、ほとんど必ず数学アレルギーになってしまう。そしてもともとの許容量が大きいことの反動だろう、アレルギーが発症したときの症状は一般の人よりすこぶるひどい。こればかりは、アレグラムも効き目がまったくないほどだ。

数学者の多くは若いときに成果を挙げる傾向があるとはよく言われるが、それにはきちんとした理由がある。若いほうが、頭脳が働くからではない。年をとると発症したアレルギーに悩まされ、研究どころではなくなるのだ。

くだんのM先生も、無論、例外ではなかった。

見事に新薬を開発したのちに、M先生はE高へ

と凱旋がいせんした。

職場復帰してからも、彼は数学に触れつづけた。そしてついに、五十路いそじ近くで数学アレルギーに罹つてしまったのである。

でも、だからどうした。そんなことはM先生には関係ない。使命感と責任感の強い先生だ。いまでも毎日教壇に立ち、生徒に向きあいつづけている。数学の美しさを布教すべく。

いくら真っ赤な目になって、激しくしゃみを繰り返そうとも。

鼻の穴に、いちいちティッシュを詰め直さねばならなくとも。